

卷頭言

アーバン化の理想は ルーラル化



国際日本文化研究センター 教授
—— 川勝 平太*

農村と都市とは対立的にとらえられがちだ。だが、世界の諸都市の比較研究がすすみ、近世日本の都市は、近代西洋の都市と比べて、農村と融合した「農村都市」(agricultural town)であったと特徴づけられている。つづめれば「農都」である。字のごとく農村と都市とは一体であり、共生・共死の運命共同体であったわけだ。

幕末に訪日した西洋人はそのような日本の都市をガーデンタウン（庭園都市ないし花園都市）というコンセプトでとらえた。江戸だけでなく、北は津軽から南は薩摩にいたるまで、いずれの城下町も、煙突や工場群はどこにもなく、水、緑、花にあふれていた。日本の生活景観はガーデンに囲まれていた。当時来訪した外国人の目に映じた日本の美しい生活景観への賛嘆は多くの記録に残されている（それを数年前に渡辺京二さんが『逝きし世の面影』（葦書房）にまとめた。一読に値する）。

近世初期からの園芸の蓄積が「農都」と称しうる都市景観を生んだのだ。近世日本には植木職人の数が世界でもっとも多かったといわれる。それだけに近世日本の都市のたたずまいは、近代西洋の都市の生活景観とは対照的であった。近代化の先頭を切ったイギリスをドイツ人のエンゲルスが青年時代に訪れた。そして彼が『イギリスにおける労働者の状態』という著作で描いたイギリスの工業都市（以下「工都」）の姿はスラムである。エンゲルスの友人のドイツ人マルクスはイギリスに亡命して『資本論』を書いたが、そこで描かれたのはイギリスの「工都」群で搾取されている労働者の貧困である。

しかし、このイギリスの「工都」群を賛嘆の目で見た外国人がいた。それがほかならぬ日本人である。明治5年にイギリスを視察した岩倉使節一行だ。その記録にいわく

「工業貿易は全イギリスの富を図る要領であり、国民の注意はおもに工業貿易にある。ゆえに人民は各地の都市に集まって、村落に住まうものおのずから減少し、農作食用元品の生産は、ますます欠乏するのをまぬかれない。その欠乏は工業貿易の利益でもって買入る。これらの事情はことごとく日本とは正反対である」（『米欧回覧実記』二、岩波文庫、384頁、読みやすく改めた）。

明治日本のリーダーたちは自国の「農都」を、まさにそれとは正反対の「工都」に変えるという不退転の決意をした。以来、日本では工都の建設ラッシュになった。それは農都を壊滅させた。戦後の高度経済成長以降は農都破壊の波は僻地にまで及んだ。

* 当研究所参与

「工都」建設は実現した。だが、近代化は本当に工都化が終着駅なのだろうか。「近代化とは工都化である」というのは錯覚だったのではないか。

マルクスやエンゲルスのような外国人にとってのみイギリスの「工都」群が異常に見えのではない。当のイギリス人の識者も都市問題を憂えていた。ジョン・ラスキン（1819-1900）はマルクス（1818-1883）と同世代であるが、こう書いている。

「内には清潔でにぎやかな街路が走り、外にはひろびろとした大地が横たわる。塀の周囲には美しい花園と果樹園が帯のように広がっているので、町のどの場所からでも、新鮮な空気と草原に遠い地平線の眺めに接するに数分とかからないであろう。これこそ究極の理想である」と（『ゴマとユリ』）。

これは単なるラスキン個人の究極の理想だったのではない。この一文は、後にガーデンシティの名を高からしめたハワードが『明日の田園都市』で引用したものだ。そして、その理想をハワードは「都市と農村は結婚しなければならない」という一文にまとめかえした。要するに「農都」である。それをどこで実現するか。「（イギリスの）農村には美しい景観があり、広い獵園、スミレの香りの漂う森、新鮮な空気、さらさら流れる小川」がある。農村だ。農都の建設のためにガーデンシティ協会が設立された。レッチワースやウェルウィンでガーデンシティが建設され、世界の都市建設に影響を与えた。エンゲルス、マルクスが憤り、工都を克服するためにラスキンが理想を描き、ハワードはその理想を実現したのである。以来、ガーデンシティは都市建設の理想となった。

とすれば、都市の理想は、逆説的だが、「農都」であり、推進すべきは、逆説的だが、アーバン化というよりルーラル化だ、ということである。

ふと、思う。「日本のラスキン」はいないのか。

宮沢賢治をあげたい。

「正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである。

われらは新たな美を創る 美学は絶えず移動する

「美」の語さえ滅するまでに それは果てなく拡がるであろう

おお朋だちよ 正しい力を併せ、われらすべての田園とわれらすべての生活を一つの巨きな第四次元の芸術に創りあげようではないか。

まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばろう

われらに要るものは銀河を包む透明な意志、巨きな力と熱である

永久の未完成これ完成である」

これらは『農民芸術概論綱要』の一節である。全集本で僅かに全14頁、余りに短いため、一書にまとめられることは滅多にない。賢治は生前にこれを発表せずに羅須地人協会で講義した。この綱要はマルクスの『フォイエルバッハにかんするテーゼ』（文庫本で6頁足らず）を格において凌駕し、ラスキンの名文にも並ぶだろう。広く読まれることを望みたい。宮沢賢治の崇高にして美しい理想を実現すれば、農都は夢でない。あとは「日本のハワード」の出現をまつのみである。

（参考：川勝平太『「美の文明」をつくる 「力の文明」を超えて』ちくま新書、2003年）